

〔饅頭屋本節用集時之節〕篠目

〔書言字考節用集時二候〕凌晨凌晨 凌晨白文集抄 五更萬葉抄 篠目俗字 東雲同上

〔冠辭考二〕いなのめのあけゆきにけり又玄の、めのほからくと明行ば

萬葉卷十にの歌七相見久狀雖不足稻目明去來理舟出爲牟嬬こを曉のごと、は誰もいへど、その

よしをいはねば、おもふに、いなのめとはあしたの目てふ語也けり、何ぞなれば、古事記に、神武降

此刀狀者穿高倉下之倉頂、自其墮入故阿佐米余玖汝取持、獻天神御子、故如夢教而、且見己倉者、信

有横刀といへり、この阿佐米余玖は且目吉也、後世の人もあしたに悦ぶ吉も也、日本紀にも、高倉曰唯

唯而寤之、明旦云々と同じ事あり、この寤之、明旦と、右の阿佐米と同じことにて、かつ阿佐と阿志

多と又同じ語也、志多反は佐さて其阿志多の阿志を反せば伊となる、多と奈は韻通へり、然れば

伊奈のめの明ゆくとはあしたの目の明ゆくてふこと也、故に此語を夜の明ることに冠らせた

り、中古今和歌集に、玄の、めのほがらくと明ゆけばてふも、朗らかに明行とつづけて、右の

伊奈の目の明ゆくと同じ語也、いかにぞなれば、玄の、めは、しなのめともいはる、奈と乃はその

しなを反せば、佐となりて、しなのめは佐の目となる、さてその佐の目は、阿佐の目のあを略きた

るなれば、右に伊奈のめは阿志多の目てふ事といへるに、全く同じき也、上にいふ如く志多反も

奈とは同、田舎人の夜の目佐の目もあはせずといふは、夜の目朝の目をも合せぬてふなるを思

へ、又おもふに、いなのめの明とは、寢目明とも意得べし、宿を寢たる目の覺るを、目の開といふは

俗なるやうして古語也、

〔倭訓栞前編十一〕玄の、め 東雲をよめるは、曉の雲の細やかに明わたるを、篠の芽にたとへい

ふなるべしといへり、神代紀に細開磐戸窺之と見えたる、是玄の、めの明行空の言本也とぞ、

〔古今和歌集十三〕題をえらすす
よみ人をえらす